

内地は遠かった

飯塚市 篠崎 光寛

「誰か元機関士の人はいませんか」「汽車を運転できる人はいませんか」。25両編成の屋根のない貨車に乗っている日本人は、立ち止まったままの貨車をどうすることもできなかった。長い列車は、草原の満州平原に夕焼けのとばりを受け、長い影を落としてた。ソ連兵が『機関車を運転できるのは元軍人に間違いない』と汽車を止め、連れ去ってしまったとの噂は本当だった。素早い伝達で、老人の方で機関車を昔運転していた人が表われ、無事出発することができた。その間、小型飛行機がどこからともなく飛んできて、翼を左右に振って、パラシュート付の通信筒を落とした。『日本人の皆様、力を落とさずがんばって下さい』との文章で、メガホン片手に中年の男性が、止まっている列車の端から端まで大きな声を張り上げて通信文の内容を告げていた。

6才の私にとって、汽車とはお客さんが乗る場合、屋根がなく板張りの上にゴザを敷いて運動会見学のようにして座るものだと思っていた。

昭和21年8月、日本人は一斉に満州から本国へ向けて帰国するのである。父が軍関係の仕事だったので、2階建ての10棟位建て並ぶアパート群の一軒に住んでいた。ソ連政府が8月9日宣戦布告してからは、たびたびソ連兵の非常点検が実施され、この日は、中庭に日本人は全員家から出され、銃剣付鉄砲を突きつけられ、両手を挙げさせられ、その間に残りの兵隊たちが靴のまま各軒に入り込み、カメラ、時計、双眼鏡等貴重品を持ち去ってしまうのである。私は恐くて、整列中に握りしめていたパッチンを地面に落としてしまったり、オッシコをもらしてズボンを汚した。兵隊の中には、左腕の軍服の上に8個位腕時計をはめている者もいた。そんなことがあり、亡くなった父は絶対渡さないと言って、双眼鏡、カメラは金槌で叩き壊し風呂釜で燃やしてしまったことを覚えている。たび重なる事態に住民たちは危険を感じて、隣人同士どの家も早く連絡したり、逃げるために隠し壁を床の間に作り、子どもが通れる位の穴を作っていた。普段の生活をするときには、掛軸を掛けて穴を隠しておくのである。

とにかく早く南下して、集結地コロ島に着くことが一番大切なことなのである。貨物列車の中では、赤ちゃんが栄養失調で死亡、小さい子供達の伝染病、下痢気味の大人たち、着のみ着のままの悲惨さは言葉で言い尽くせない。途中で列車が止まった所では、平原に穴を掘って幼児を埋葬したり、隣組で薪を集めて握り飯を作り、列車の中で配給するのである。突然の日本への帰国、みんな悪夢を見ている状態であろう。真夏でもあり、簡単な服装とそれぞれの家族全員が両手に着替えぐらいの品物しか持っていないのである。母は、門司から戦前嫁いだが、和服が好きで、祖母は送り出すとき「タンス3棹に和服を詰めたよ。本当に惜しいことをしたよ」と口癖のように帰国して祖母は言っていた。みんな帰国者は、すべて財産は放棄して命だけあればよいという覚悟で帰ってきた。死亡時、行方不明時、身許が判明しやすように名刺位

の大きさの白布（住所・氏名）に記入して、左胸に縫い付けていた。しかし、私たちの名前は母の嫁ぐ前の氏名に変わっていた。子どもながら不思議だなと案じていた。理由はソ連軍の方で官公庁の職員名簿を手に入れ、名前が判ると勤めている者は捕虜とされ、シベリア収容所行きが待っていると噂が広がったからだ。コロ島に着くと、雲一つない晴天だった。きれいな海に貨物船が岸壁に横付けされていた。錨がおろされた海面に、小さな魚が水面の上をパクパクしていた。よく見ると人間のだす汚物を食べているのだった。集結地はトイレもなく、大人数が集合しているため、海に垂れ流しているのだろう。船は三層ぐらいになっていて、換気装置が悪いので、夏でもありむし暑くて、中で眠れないのは当たり前だろう。航海中は荒海の玄海灘を通過するのであるが、夜は甲板に寝た方が涼しいし、よく眠れるので、船員の注意を聞かない人もいたようで、昨晚も誰か海に落ちて行方不明とかいうことをよく聞いたものである。食糧は来る日も来る日もカンパンのみであった。現在売っているような味とは考えられないものだった。このためか、私は今でもカンパンをスーパーでよく買う。当時2才の三男が栄養失調で、肋骨が浮き出るほどやせ、衰弱していた。父は船内での死を予想し、空のトランクを用意して乗船した。もちろんその日が来ると遺体をその中に入れ、水葬をするのである。現在、本人は幸いにも高校生2人の子どもを持つ親になっているが、幼い時の状態の原因がもとで片肺が機能しないほどのぜんそく等尾を引いて、6ヶ月毎に入退院を繰り返す病院暮らしを余儀なくされている。

船は機雷を避けるため、通常より1週間位長くかかった航海だった。しかし機雷に触れず沈没を免れたのは幸いであった。

入港地は佐世保であった。船員の「内地が見えましたよ」という大きな叫び声で、一斉に全員が甲板に出た。佐世保の沖合の薄緑の小さな山々を見て、みんなはハンカチを眼に当て嗚咽していた。佐世保港沖合に停泊すると上陸が始まるのであるが、船員達がみんなまで白い布を集めて墨で書いたのであろう。船腹に「ごくろうさまでした。お元気で」という大きな垂れ幕が貼られていた。私たちは、長いタラップで船の下に横付けされているイカダに乗り移ると、軽やかなエンジン音を響かせながら後にした。船員達の「お元気で、さようなら」という声が遠ざかるまで、皆手を振って別れのあいさつをしていた。

港内の波しぶきが顔にかかり、その滴が口の中に入り辛かった。広大な川しか知らない私にとって、なぜ塩辛いのか不思議でならなかった。イカダの端の方に引っかかっているクラゲを見て「何だ」「何だ」とつぶやいた。見るものすべてに新鮮さを感じた。

港に着くと、魚市場のような広いところに、一列に並べさせられ、順々に頭から下まで白いDDTをかけられた。多分シラミが身体にたくさんいたのであろう。佐世保駅から一旦、落ち着き先の母の実家の門司に行くことになった。この時、人が乗る汽車は屋根があり、ふわっとした座席があり、上下のガラス窓があることを生まれて初めて知りました。私はずっと何もかも珍しいので、門司まで顔を出しっぱなしで、着いたら蒸気機関車なので顔が真黒になっていたと聞いた。

私はこの混乱のため親の手に引かれ、桜咲く校門からの1年生の入学式をしていません。内地に帰ってきたら2年生だったので、母親と転入手続きのため校長室に入ると、いきなり初めてテスト（五十音の筆記）があり、心細くなって泣きながら受けた。2年生編入が認められたが、学習で不足している部分があるということで、2学期中放課後一人だけ残され、あのサツマイモ弁当を食べた後指導を受けた。担任の先生の熱心な配慮を今でも感謝している。しかし、当時先生方が学校の畑に大根をたくさん植えられていたので、勉強途中「間引きを手伝って」と言われ、その仕事をしたのが一番印象に残って楽しかった。

何らかの面で、戦争を体験した人々は、「二度と戦争体験をしたくない」とよく言うものである。その通りだろう。21世紀に向けて私たち日本人はすべて平和を愛し、平和を築く国民に育てて欲しいことを願わないではおられない。